

渋江長伯『蝦夷草木腊葉帖』(1799)のラン科植物標本

札幌市 高橋 英樹

はじめに

今からおよそ 220 年前の 1799 年 (寛政 11 年)、江戸幕府の命により奥詰医師・巢鴨葉草園総官の本草学者渋 (澁) 江長伯 (しづえちょうはく) らにより蝦夷地で採集された押し葉標本 (腊葉標本) コレクションは渋江長伯『蝦夷草木腊葉帖』(渋江 1799a) と呼ばれ、本草時代に北海道で採集された植物標本としては最古級のものである (外山 1992, 山岸 1996, 高橋 2022)。

北海道南部の松前に四月二十二日上陸、太平洋側を東進しエリモを経て道東厚岸に至り (採集月日七月一日~三日)、来た道を引き返し九月二日に松前に帰還した (山岸 1988)。総計 142 日間とされる (山岸 1996; 松前を起点とする蝦夷地滞在日数は 128 日間) 植物調査だった。現在、この渋江長伯『蝦夷草木腊葉帖』(以降「渋江コレクション」) を実検して標本状態を確認し、再同定し、採取地名、和名・アイヌ名・漢名などを整理する作業を行っている。しかし標本には花や果実のない個体、虫害の激しい個体もあり、未だに全標本の同定終了に至っていない。

本小論では、一例として「渋江コレクション」中に見られるラン科植物を取り上げ、標本情報を記録し、疑問点・課題について記す。なお「渋江コレクション」の精細画像は「蝦夷草木◆セキ◆葉帖／渋江長伯等」として北大図書館北方資料 DB [<https://www2.lib.hokudai.ac.jp/hoppodb/>] で公開さ

れているので、本論と合わせて参考にしてほしい。

「渋江コレクション」中のラン科植物標本

「渋江コレクション」396 点の標本中に、ラン科植物標本は 8 点あった。ラン科は標本点数の多さでは 11 番目の科となり、北海道での野外調査においてはほぼ妥当な採集点数と思われる。渋江らの蝦夷地調査においてはラン科を特に意識して採集した (あるいは採集しなかった) 訳ではないだろう。

以下 8 点のラン科標本を葉帖・台紙番号の順に記す。北大 DB での【葉帖番号・台紙番号 (DB の検索ページ番号は表紙から始まっているため、台紙番号より一つ数字が大きい)・植物名タイトル】に続いて、台紙左上に書かれた「番号・和名」・台紙向かいページの貼付紙片にある「産地名／和名ないしアイヌ名／漢名」・台紙向かいのページ下部に貼られた宮部ラベルにある「和名／学名／採集月日 (全て寛政十一年 (1799 年) の旧暦)」を追記し、標本個体の特徴と同定上の問題点を述べる。なお、台紙左上の「和名」は白井光太郎 (あるいは牧野富太郎) によるもの、貼付紙片は渋江長伯本人が記録係の土岐新甫によるものと推測される (高橋 2022)。宮部ラベルでの採集日は旧暦なので、現在使われる新暦ではこれより約 1 カ月後に読み替える必要がある。なお本小論では旧暦は漢数字、